心残りだっただろうなぁ

三木俊平

「あいつにだけは、腎ガンになったことを伝えてくれ」

平成十九年七月初旬、従兄弟の姉から「弟がこう言っているので連絡します」と私の自宅に電話があった。

その一週間余り後、今度は従兄弟の奥さんから電話が入った。

「主人が毎日のように、『あいつは見舞いに来んなあ』と繰り返しています。申し訳ありませんが、一度来てやってもらえませんか」

再度の連絡を受けた私は、そんなに病状が進行していて重いのかと案じながら病院へ急いだ。行く道々、彼にはどのような言葉をかけたらいいのか、ずっと思案していた。

「医者の自分がガンになってしまった。情けない」

病室に入ると、彼はすっかり落ち込んでいた。五十九歳で発病した同い年の従兄弟を目の前にして、軽々しく励ましたり慰めたりすることがはばかられ、なかなかお見舞いの場にふさわしい言葉が見つからなかった。

この従兄弟と私は、兵庫県北東部の山村の同じ集落で生まれ育った同級生である。

二人の間柄は、他の多くの従兄弟たちとの間にある親近感とはやや異なるものである。「竹馬の友」とか「親友」とかでもなく、また「兄弟のよう」というものでもない。「従兄弟以上の身近な仲」とでもいおうか、一味違う仲という距離感である。

手元に、三輪車に乗る私とその横に立つ彼を撮った一枚の写真がある。小学一年生の頃のもので、当時お互いの家をよく行き来し一緒に遊んだことを鮮明に思い出す。

相撲を取ることも多かった。彼の方が背は高く、四つに組むと私は浮き上がって力が出せず、負けることがほとんど。それでも、彼と出会うと飽きもせず相撲を始めていた。そんな二人の遊ぶ姿を、いつも私たちの両親は「二匹の子犬がじゃれあっているようだ」とニコニコ笑いながら眺めていた。

私たち二人は、曇天や降雨、降雪がうっとうしい長い冬が終わり、春になると子どもの足で小一時間はかかる遠くの神社の春まつりに行くのが楽しみだった。

当時はでこぼこの砂利道で、たまに通りかかるトラックが、暫くは息もできないぐらいもうもうと土埃を巻き上げていた。でも、そんなことはものともせず他愛ないおしゃべりをし続け、体をぶつけあうようにふざけながら神社をめざした。

心残りだっただろうなぁ

二人は年に一度の屋台に心が浮き立つ。握りしめた小遣いの十円は色とりどりの駄菓子に目が眩み、瞬く間に無くなってしまう。また、それぞれの母から預かった賽銭の十円も香ばしい匂いに負け、遂には細切れのイカ焼きに化かしてしまうイタズラ坊主だ。二人で歩いた砂利道や二人を魅惑した屋台の情景がついこの前のことのように思える。

彼は同級生の誰もが認める努力家で、勉強が良くできた。山村の小さな学校とはいえ、小中学校を通してほぼ学年一番だった。子どもの頃から医者になりたいと常々言い、その志を果たす努力をしてきた。受験には少し苦労をしたが、見事にその夢をかなえ、卒業後は都会の病院で活躍していた。

そんな彼には、みんなと少し感覚が違うと言えば言い過ぎになるが、ちょっと感性が異なるかなというところがあった。だが、それは不思議なことに、誰も憎めないものであった。

平成九年十月、中学時代の同級生の「生誕五十年記念」とたいそうな名前を冠した同窓会が、ふるさとの温泉施設で開かれた。

「俺にビールをついでくれませんか」

彼は、和服で着飾った小太り気味の女性にお酌の催促をした。同級生の彼女は、「まあっ」と呆れながらもお酌をした。その後「わたし、仲居さんに間違えられたわ。もう、昔と全然変わっとらんで、あの人は」と、ぼやきながら各テーブルを回った。同級生のみんなは、「彼らしいなぁ」と大笑いし、同窓会はいっそう盛り上がった。

「お金が足らんのなら貸すで」

平成十九年十月、私の父の葬儀のとき、彼は親戚が集まっている控え室で私にこう話しかけてきた。祭壇が白菊の花一色で地味だったから、私がお金の工面に苦慮していると思ったのかもしれない。私の姉と妻は、「みんなの前で、なんぼなんでもちょっと……」と顔を見合わせていたが、彼には私に恥をかかせたという意識はたぶんなかっただろう。

「いやいや。親父は生前ケチっぽく、何とか葬式代は準備してくれていた。大丈夫だ」

私は、冗談交じりにこう返し、その時々の場の空気を余り気にしない彼の相変わらずの様子に、苦笑いするばかりだった。

平成十九年一月、ガンの発病が分かる半年ほど前のこと、彼が珍しく私の自宅に電話をかけてきた。

「そろそろふるさとへ帰り、地域医療に力を尽くせないかなと思っている。地元の診療所の事情はどうなのか、調べてくれへんか」

地域医療を支える医師の安定的な確保に長く腐心してきたふるさとでは、彼が医師になったときから、いつかは戻ってきて活躍して欲しいと期待をしていた。

地元で公務員となり医療関係の業務にも従事したことのある私にとって、ふるさとの難

心残りだっただろうなぁ

問に従兄弟と手を携えて取り組めることに感慨深いものを感じ、また何よりも心の弾む話でもあった。早速に事情を調べ、関係者とおおよその下準備を進めていた。

その矢先、ガンの発病が分かり一年二か月余り闘病。この間には、素人である私たちとは異なる、医療の専門家であるが故の悲嘆や口惜しさ、希望や諦めなど錯綜した懊悩があったことだろう。そして、平成二十年九月、彼は還暦を待っていたかのように逝ってしまい、ふるさとに寄与したいという願いは実現しなかった。

「本当に心残りだっただろうなぁ」

柩のなかで静かに眠る白衣姿の従兄弟をじっと見つめる。彼が宿願として情熱を燃やしてきた医療の道、その半ばで生涯を終えてしまった。愛情を注いできた妻子のことや逆縁になってしまう高齢の父親のことなど、公私にわたるいくつものことが心残りであったに違いない。私は柩を前に、じわっと滲んでくる涙を抑えることができなかった。

早すぎる逝去から十五年近くが経つ。

一昨年来、各地はコロナ禍で大わらわである。

彼が存命ならば、きっとふるさとで老練な現役内科医として、使命感に燃え住民の健康確保に奔走してくれているのだろう。

私は今、彼の計り知れない無念をなおさら思う。